要に応じて電子顕微鏡写真や線画を添えて図版が構成され，それぞれの図版には和文と英文の記載がついている．ほとんどの場合，淡水藻の同定には顕微鏡を使うので，見た状態がそのまま再現される写真図は藻類の実態を示すのに効果的な面が多く，同定のよい助けとなる．1頁に1種，1巻が100頁より成るので，計100種が収録される．1984年に第1巻が刊行されて以来合計2,000種の淡水藻が収録されたことになる．かつて同じ出版社から出た日本産淡水藻図鑑（1977）の収録種類数が2,308であり，ほぼそれに近い数の淡水藻を写真で見ることができる．わが国の湖沼，池，水田，河川などで普通に見る微細な淡水藻のほとんどが収録されるので，藻類の研究者だけでなく，広く藻類に興味を持つ人，環境問題，水理・土木の問題等に関係をもつ機関や研究所にも備えておきたい出版物である．既刊行の諸巻の価格は1，2巻各¥4,000＋税，3～10巻各¥5,000＋税，11～19巻各¥7,000＋税である．なお，珪藻類は収録されていない．この分類群は別の本として同じ出版社から近く刊行の予定という

□山岸高旺: **淡水藻類写真集ガイドブック** 144pp. 1998. 内田老鶴圃. ¥3,800＋税.

先に20巻の刊行を見た山岸高旺・秋山　優（編）「淡水藻類写真集1～20巻」（内田老鶴圃，1984～1998）は図版ができた種類から順に1頁に1種を扱い，次々とルーズリーフ形式にファイルして巻が構成されている．編集上の理由と思われるが，目的とする種類が所属する綱・目・科等がどのような特徴をもつかの解説や，その種がどのように分類されているかの検索表などの頁がない．このため藻類を知り分類系をよく理解する人には利用しやすいが，初心者や専門外の人々にとっての十分な利用は必ずしも容易でない．「写真集」の編者の一人，山岸博士は淡水藻の全体像をとらえることができ，「写真集」の利用をより容易にする目的で本書を書き下ろしたという．「淡水藻写真集」の使い方，図版の項目の説明，学名の解説等の導入部に続く6章で写真による淡水藻類12綱の代表属，次いで7章淡水藻類の体制と生育状況による代表的な属の分類，8章「写真集」に収録の属の写真と解説と続き，最後に「写真集1-20巻」に収録の属，種の学名と和名（学名の仮名読み）の索引を収める．6章と7章が特徴的で，6章では12綱の代表的な属が113枚の写真図と線画で紹介され，7章では，1游泳性．a被殻のない単細胞性，b被殻をもつ単細胞性，c群体性; 2浮游性．a単細胞性，b群体性; 3付着性．a単細胞性，b群体性; 4糸状体性; 5紐状体性; 6葉状体性; 7嚢状体性・管状体性に区分し，それぞれに代表的な属が94枚の写真で紹介されている．系統・体制ともに多様な淡水藻類の検索表は複雑で，その利用は簡単でない．そこで，文字による検索に代わるものとして，上記のような写真と図で見る検索を著者は考えたという．淡水藻類の全体像を理解し，分類群の特徴を知るよい方法として，本書の写真・図を繰り返し見ることを奨めている．「淡水藻写真集」とセットに備えると写真集の利用に便利であり，淡水藻の分類の大要を知るにも便利である．（千原光雄）

□岩槻邦男: **根も葉もある植物談義** 254 pp. 1998. 平凡社. ¥2,000.

盆栽協会の会誌に連載したもので，35種類の植物，主にポピュラーな樹木，について一種一話にまとめてある．植物学ばかりでなく，古典や文学からの引用，著者の実地体験に基づく見聞も加わり，進化や環境保全のことまでさりげなく織り込まれている．読んでおくとずい分話しのタネを仕入れることになるだろう．（金井弘夫）